

---

# 彼と私のライフワーク

斎藤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼と私のライフワーク

### 【Zコード】

Z5237W

### 【作者名】

斎藤

### 【あらすじ】

ルームシェアの相手である親友が、急遽一人暮らしをすることになった。

欠員補充のために学生用掲示板で呼びかけてみると…

その貼り紙をもって現れたのは男子学生！？

しかも公衆の面前でホモセクシャルで安全牌と公然アピール！？

「……私は！この世で一番男が嫌いで、募集したのは女子のみだツ！！！」

私：アキとちょっと変わった彼：ワタルのライフストーリー。



## ？【発端はチラシ一枚】（前書き）

### 【注意】

話の設定上軽いBL表現があるかと思います。

その他ネタとしての、下品な話題・表現もあるかと。

苦手な方はよろしければご自分で避けて頂けると幸いです。

また、現代日本という場所で考えていますが設定としてフイクションであり町名なども何ら関わりないことをご念頭に置き、楽しんで頂ければ嬉しいです。

常時失踪予定。気長に書き進めたいと思います。

?【発端はチラシ一枚】

昼食時のざわつく大学構内のとある食堂。

安価で早さが売りで味は要努力ありと、どこでも同じであるう若学生でもまあ値の届きやすい範囲であるとしか言こようのない、正に普通の食堂である。

腹を満たすだけで充分な食事にありつくなには御の字といつたところ。

「この春大学一回生に無事繰り上がり、麗らかな季節というには頭を抱えるしかない考え方には頭を悩めつつ日々を送っていたアキは。うどんをすすつた手を止めざるを得なかつた、背後に立つ人物に対し思いつきり眉を潜めて睨みつつ、トリップした思考を呼び戻した。

「……もう一度？」

「このルームシェア募集を見て来たんだけど」

君だよね、秋本さんと付け足して。

明るいトーンの短い茶髪にスラリとした体型の、見た目上確かに男性形の人間は。

見覚えのあるチラシをひらひらと揺らしながら、笑みを浮かべてそ

う告げた。

聞き間違えた訳ではないらしいその言葉に、腹の底からため息とともに食したうどんまで吐きだしかねない気分である。

『その口キブリでも見るような眼やめなさい』と再三注意してきた親友の顔を思い起こしながら、アキは冷静にならうと鬱憤を堪えた。

事の発端は、その親友に始まる。

中学の塾仲間であつた彼女、柏谷ありさと交友が始まったのは高校受験を控えた夏期講習から。

同クラスとしての初日、偶然席が隣り合い、波長が合つた共に帰宅するまでの電車仲間となつた。

希望進路は異なつていたが、切磋琢磨する仲としては丁度良く、すぐさま行き来する程に仲良くなつた。

高校へ入学してもその付き合いは薄れることなく、アキとしてもありせどしても、学校は違えど互いが互いを一番の親友とみる付き合いを重ねるに至つた。

そしてアキにとつての恥まわしい吐き捨てたい記憶も同時に呼び覚ますものが、それはここで思い起こすことではない。

ぼろぼろの身ながらも大学受験で必死になつたのは、ありさが美大として名のある都会に居する大学を希望し、なお且つルームシェ

アをしないかと持ちかけてきたからであった。

アキにとつて故郷はただの離れたい場所でしかなかつたし、都会に  
も多少の憧れがあつた。

とある事情により極端に人付き合ひが苦手になつていた身として、  
大親友の彼女とのルームシェアという新生活も想像するだけでも樂  
しいに違ひないと思う他なかつた。

絆された感あつても、私のために頑張れと訴えられればそこまで  
悪い気もせず。

アキは猛勉強の末、彼女の希望大学に隣接する私立大学の経済学部  
に入学を果たし、見事授業料半無償の選学生としての切符を得た。

一回生としての一年はあつという間に経ち、想像通り笑顔のまま  
に過じせた日々と言えた。

意見のぶつかり合いもあれば、数日顔を合わさない日もあつたけれ  
ど。

より深く互いを理解し、成人に向かう身としても勉強になる時間で  
あつた。

時は巡り、二度目の春の暮らしを迎へつ。あ  
ありさは爆弾を投下した。

「この家、出ようと思つ  
「…………は、い？」

言葉を理解するのに随分と時間をかけたけれど、意味を理解した  
途端ドツと嫌な汗が噴き出した。

一年を送る上で、言いつこなしにするべく互いに解決したい点には  
口を紡がず言い合おうと約束し、そしてその都度喧嘩しては理解を

重ねてきた。

朝のシャワー権はあいさが訴え、なるべく朝食夕食をともにとはアキが。

自室以外の居間とキッチン、風呂場と玄関の掃除は交代制の受け持ち。

調理の好きなアキが食事を作ることが多いから、皿荒いはありさが。洗濯は各自でもあり、一回頼めば相応の取引を。

テレビ番組の選択権は「いいだしやマジサーディで割り切ることが多かつた。

そうして2人で生活してきた。

その片方が欠けるといつのは、いつたことないといつたことなのだろうか。

いつの間にか俯いていた頭に、ぽふんと柔らかい手が当たられて、ゆっくりその主を仰ぐ。

「アキとの生活が嫌になつたんじやない。苦である訳がない。私は、ちよつと事情が出来ちゃつたの。聞いてくれる?」

困つたように笑うその表情に。いつもより落とした声音に。彼女にも葛藤があつた上のことなのだと、気が付いた。

常々人の側に立つて考えることが出来る余裕を羨ましいと言つあたりさが、私の気持ちを汲もうとしないことなどないのだ。だからこそ、私が落ち着くよう笑つて見せててくれる。少しでも言葉を伝えようとしてくれる。

思わず目頭が熱くなってしまったが、数回呼吸を重ねてこくりと頷いた。

「あのね、彫刻を選択したいって言つて、その専攻試験も通つたつて話したじゃない」  
「そうだね、お祝いしたもんね」  
「うん。で、この春から本格的に学べるの。真田先生の指導貰える」「そうだね。入学前から、ずっと、その先生のことばかりだつた」

新居を決めて下見にお互いの学校へ足を運べば、ありさはその真

田海道という新進気鋭として海外にも広く名を売り。

後進の育成に早くも大学講師という道を選んだ60後半の芸術家のことを、それはもう熱く熱く語つた。

細部の細部までこだわる、立体のものとしての可能性。見方。形を決められ見方を定められるのを拒み、様々な視点から見られて理解を得られてこそ作品の全貌を委ねられるのだと。その指導者の美術性も勿論、メディア媒体で伝わる微かな人隣りや人柄に惹かれ。その狭い門下を彼女はくぐつた。

現役合格など稀のものと聞き及んでいたのだ。入つてからの試験に向けての猛攻も、彼女の部屋の荒れ方を見れば押して知るべしことだつた。

「真田先生が何か言ったの？」  
「一人のタマゴとして、自分で立てないのは視界を狭めるつて」「つていうと？」  
「ルームショアすることを話したの。人と触れ合う生活から得ら

れるものもあるけど、一人だけの空間だからこそ触れる見方もあるって言われたわ。しんどい時に生活の基盤から支えてくれる友は得難く変え難いものだけど、本当に一人きりの生活であれば此処にいられたか?って聞かれて。思わず黙つたの

「……それは、私が気遣つたことが駄目だつて言われてるのかな」「違う違う。あの人はそこまで考えてないよ。ただ甘える場所が帰る場所と同じつていうのが、これから私のにとって良いものかどうか考えてみるつてことだと思つ」

一人きりの暮らしが好きらしいから、単純に疑問に思つただけだと思うよと。

ありさは眉を寄せて笑つた。

「確かに、アキの好意に甘えてたのは本當だから。助力がなくちゃご飯食べずにしゃかりきになつて、人としての暮らしあも危うかつたかも」

「それは、私がしたかつたからであつて……」

「でもおんぶされてたわ。夜食食べたいつて起こしちやつたこともあつた、栄養とれつて怒られて、課題こなしてる最中に突撃されて食べさせられたこともあつた」

温くなつただろうレモネードを口元へ寄せて、ありさは目を伏せて軽く笑んだ。

「実家通いの子もいる。一人暮らしお子もいる。場合は様々。でも、一度自分の力だけで進むことも私には必要だなつて、思つたの」

「アキのことを、家族みたいに思つてる。だからふざけながらも、懇々と甘えてしまつっていた。…良い機会がなつて、思つたのよ、

「私にとつても、あなたにとつても、ね」

さりと、長いウエーブのかかつた深い栗色の髪が一房、小首を傾げて笑つた彼女の胸元へと流れた。

高校の時は黒だった。パーマもかかつていなかつた。

少し円やかだつた顎のラインも、忙しない生活ゆえか引き締まつてた。

爪先にはかなり気を遣つていたのに、今では画材か何かでよく汚れが残つてゐる。

時間が、流れている。

生きることを見据えて、私に正直でありたいのだと誓つたあつさの、あの頃と変わつてないもの、変わつたもの。

同じだけ、私も少しずつ、変わらなくてはならない。

成長しなければ、この親友に胸を張つてはいられないのだから。

「…もう、住む所も見つけてるんでしょ」

「ばれたか。最終手段は泣き落としたのよー」

「幾らなんでもそれはあまりにもかっこわるいから良かったわーと、  
呑気に笑っている。

少しばかりその楽観さに腹が立つて、つんけんしながら言つてやる。

「じゃあ、私の信用するありさの審美眼に則つて、きちんと相手見  
つけてきてよね」

「え、あたしがあ？！」

「当たり前でしょ。あんたが勝手するんだから、その分埋められる  
相手じゃないと領きませんからね。あと家賃も余分に払うつもりな  
い」

「うへえ…払えて2ヶ月分なんだけど」

「払いません。あと引っ越しもしない」

「確かに駅から徒歩5分の安い商店街ありいの、優しいおばあさま管  
理の優良物件だけど…」

面倒がつてぶうぶうたれる、この困ったちゃん。

それでもこうして晒してくれるのは、私が親友であり、彼女の理解  
者であり。

「ありさが、此処を私たち2人の家にしようって言つたのよ？」

“家族”は“家”で待つもんでしょう、一人の場所へ移るなんてと

んでもないわよ」

「この家こそが2人の家なのだ。  
移る気になど、なれるもんですか。

呆気にとられた彼女を笑つて。

引っ越しなんて大面倒頑張つて、と「冗談ぽく言つてやつた。

それが3週間前。

先週からは春学期の講義が始まった。

一足先に始まつていたありさは、講義や課題にバイトとその最中に荷物を少しづつ梱包し、私が初日の講義を終えた頃に部屋を空けた。肝心の欠員は、幾度と彼女から紹介された人物に会つてはみたが。時期が時期なのか、それとも提示した条件が条件なのかこれと領ける人がいなかつた。

「アキ、あんたどうすんの」  
「絶対！これだけは譲らない」

3人目の候補として連れてきた友人と対面して、五分と経たずあ  
る一言を皮きりに合わぬと告げて喫茶から出てきた。  
ありさとしてはその条件でも見合つとして呼び出したようだが、生  
活を共にする上で妥協してはならないこととアキは決めているのだ。  
我が家へと向かいながら、背後からありさが宥めてくる。

「ショーガないでしょ。今時の女の子が家に彼氏呼びたくない訳がないでしょ」

「昭和の家庭と言えば良いわよ。電話するのもびくびくして寄りつかないでほしいわ」

「…私も約束しといたんだけどなあ」

「正直真に受けなかつたんじよ。ドン引きしてたのが良い証拠よ

「まあそこらは悪かつたと思つてるわ」

物件として紹介すれば、あの家は正しく優良なのだ。

折半する家賃もかかる光熱費も初めから提示済み。

ベージュの煉瓦と朱色の屋根がアクセントのアンティークな外観も、玄関のセキュリティも値段のわりに整っている。

人の良い管理人の椎名さんも、孫のように扱ってくれるおかげで信頼のにおける人なのだ。

ほいほい釣れた友人にもう一つ条件を告げれば、大概は変な顔をしつつも了解了解と返事をくれたらしいが。

やはり身内の気易さとでも言つのか、きつぱり他人様として対峙すれば面白いほどぼろが出る。

アキとしてはその辺り、顔を使い分けるのが得意なものになってしまつたからこその接遇である。

ありさも適度に人当たりの良さを押し出し判断するが、アキほど深く考えられない事情があるのだ。

「もう少しさ、妥協しようよ」

「断る。男を住居に入れるなんてぜつ・た・い・いや」

「引っ越し屋は入れたくせに」  
「それは社会で生きる上仕方ないでしょう。半分が男とかマジないけど」

家に立ち入る男を想像しただけで出た鳥肌をありさの眼前に見せつける。

わかつたわかつた、と呆れながらも彼女は笑つて腕を下ろさせた。

「でも、これであたしも伝手なくなっちゃつた訳だし。あんたの大  
学で募集かけてみてよ」

「余計いないよ。共学だし」

「荒治療で入つたのに改善が見られないのはどういうことかね？」

「本人にその気がないからよ」

「自信持つて言うない。あんたの言い回しが的確なのは知ってるけ  
ど、あたしの他にちゃんと友達作んないと」

「大学で困つてる訳じゃないもの。一人で出来る」

「社会で男嫌いですだなんて、通用しないつづーの」

男はゴキブリ以下と云い切つて他ないアキは、その言葉通り大の  
男嫌いである（もちろん建前とハつ橋にくるむといふ言葉は知つて  
いる）。

彼女とルームシェアを行う上で必要不可欠な条件は、友達だろうが  
彼氏であろうが肉親以外の何者でも。

それが男性ならば玄関から敷居を踏ませないと云ふことのみである。

茫然とコーヒー代とともに捨て置かれたありさの友人の顔を思い  
出す。

3人目ということで固く注意したつもりであったが、逐一論破された彼女はアキの信用足るに満たない存在だったらしい。

憤慨メールか何かがきたのか、ありさは携帯画面をしかめながら見つつもすぐに何でもない顔になつて鞄に投げ込む。

「あたしの勝手ですから付き合ひけだ、ビリジョウもなくなるのはアキだからね」

「なりません。責任とつて」

「そう言いつつもあたしに對して友達のフォローだ何だと面倒増やして悪いなと思いながら、海老フライしてくれるアキが好き」

「……フライね」

「うふふー」

甘えているのはお互い様なのだ。

けれど、新しい場所に居を移しても。アキはどつにも変わることのなかつた嫌悪感を、やはり拭い去ることが出来なかつた。

態度は悪いが、話すことが可能になつただけでも上手くいつてゐる方で。

それを理解しながらもあえて口をすっぱく注意するのがありさの役目であり。事情である。

どれだけお互い解り合つていても、互いが互いの人生に真つ直ぐであるのは本当で。

赤の他人でも、互いにその人生を応援したい心情であるのも本当なのだ。

「もつや、荒治療として男と同居すれば？」

「絶対許さないし間違つても起きないし、[冗談でもやめて」

腕を絡めて道筋を商店街へ移すありさに引つ張られつつ。  
親友の末恐ろしい発言にまた鳥肌が立ちながら、今晚は彼女の苦手なナスを副菜にとアキは心中決めたのだった。

（まさか夢じゃなく現実で事が起るだなんて、…）

喧騒の中、押し黙つたままの対男性には田つきの悪こと直覺する自分の前で。

未だ去ることもなく笑みを浮かべたまま、彼の男は突つ立つている。

むざむざチラシを取つてやつて来たところは……

（なんだろ？、悪寒が走る。話なんて聞きたくない）

けれど無情にも対面する人物は口を開く。

「秋本さんで良いよね？俺、同じ経済学科の福本ゼミで、久尾坂渡くおさかわたるね」

「はあ……」

服装は、それほどぢやらぢやらしてはいない。

黒と白しか使わず、さもそれが大人のファッショングだと思つ勘違いでもない。

靴先も怪獣の爪のように尖つてはいない。

ミニタリー系の半袖ジャケットと白い七分の重ね着。パンツはチヤコールブラウン。ショート丈のラフアウトブーツと合わせている。二十歳そこらであれば悪くない服装であり、ハイトーンの茶髪と似合っている。

人好きの良さそうな笑顔であり、女子にも男子にも人気のありそうなやんちゃ系統か。

顔は街角で読者モデルを依頼されるほどには整つているだろう。雰囲気の軽さと対照に、物腰や話し方は年の割に落ち着いて見える。笑みの雰囲気がありさに似ていること以外、特に興味を抱かなかつたが。

「それで、そのチラシが何の用？」

「用があるのは俺なんだけど…まあ良いや」

「（良くはないけど）何か言われた？誤字脱字はないはずだし、きちんと手続きとつて張り出したけど」

「え？ ルームシェアの募集、かけてるんだよね」

「気付いてなかつたんならよく読んで。募集しているのは、女・子・だ・けなんだけど。貴方性別は？」

「見て解らなかつたんなら失礼。正真正銘日本男児です」

「その男児が、女子しか募集していない私に、いつたい何の御用で  
しょ「かしら?」

「うつわすつ」<sup>1</sup>寧口調が壁を感じる……」

眉をひそめた笑みだが、それほど困つてゐる感じは伝わつてこない。

やんわりと見えながらものつけから喧嘩腰に取られても仕方のない言葉の応酬を重ねてみて。

外見からは存外見えないが、言葉尻で相手を読めるタイプなのだとわかつた。

つっけんどつた態度のアキに対しても普段寄つてくるような人間ではなさそうで、落ち着いてこちらに応対している。

印象、面倒くさそうなタイプに変更。

立ちっぱなしの彼が理由か、不穏の空気が周囲に伝染しているのか、若干視線が集まつてきている。

(…早く終わらせて此処から出よつ)

先手をとつて看破すれば一度と近づくとは思われないだろうと、一息吐いて氣を入れる。

「貴方がどういつもりで話しかけてきたか知らないけど、私は男とルームシェアするつもりは全くないわ」

「そんなに男嫌いなんだ」

明日の天気は雨。へえ、と。

まるで世間話の一環のように、あまりにも雰囲気が軽く流された事

に少し気が抜けた。

知つていて話しかけたのならば、いつたいどついう神経をしているのか疑いたい。

入学当初は自分で振り返つても散々で、声をかけられるだけで威嚇していたようなものだ。

今ではそれなりの対応が心がけられるが、知り合いはいても共に遊ぶことなど論外。

ゼミの懇親会でもどうしても参加が必要な飲み会以外は避けて通っている。

軽い気持ちのナンパも徹底無視してのけて、ゼミの女子に合コンに誘われようと付き合つたことはないのでゼミ内ではわりかし知られていることだが、顔も名前も知らない人間から言われる程知られているのは少し場合がよくない。

悪目立ちしたくないから堪えての愛想なしで留めている地味女なのに。

思わぬ所で知つた噂の広がりに、余計顔をしかめることとなつた。

そんな苦い表情の自分と正反対に、にこにこ微笑んだ彼はクイッと口元を上げた。

途端。

「性別は男。趣味はJFのキャッチャー漁りと酒に合いつまみ探求で料理もわりと出来るよ。実家は寺で次男なんだけど、長男と歳離れてて実際一人っ子歴が長いからそれなりのことは出来るつもり。周りからは社交性あるとか友達多いとか言われるけど自分家に人は上げたくない派。好きな食べ物はシチューかな具はホウレン草と鶏モモが好きで持つてる資格は書道五段剣道三段空手黒帯でも喧嘩嫌

いの平和主義でサークルは飲みサーだけど都合つゝ時くらしが参加しなくてバイトは今は本町んところでウエイターと塾講の掛け持ちで風呂は鳥の行水朝シャン派で、

「~~~~~ひよ、ちよっと！ いつたい何を、」

最後の方はノンプレスの弾丸のように流れてゆくだけで、いきなりのことに頭の中を通り過ぎるだけだった。

慌てて遮れば、イケメン三割増しの笑顔で彼自身を指わしのたまたま。

「　　んで、男にしか興味のないヘテロセクシャル。所謂ホモね  
「……は？」

はい？

「男嫌いはともかくさ、女の子として身の安全は保障できるよ。危機感じることもない完璧安全牌だからいらぬ心配することもないし。あきちゃんにとつてはかなりの優良物件とお薦め出来るよ～」

「て訳で、じつぞ宜しく。あきちゃん」

ありや。

あんたの言った「冗談の種は、思わぬ変人の縁を引っ張り寄せたようです。

茫然と見つめれば、恥ずかしげもなくにこにこ見つめ返すとんでも人間。

喧騒が遠く感じるなかで、私は思わず現実逃避の道に走るのだった。

?【一度は考えて物を言つべし】（前書き）

視点移動 ワタル編（？補完）です。

人物の心情が伝わりやすいように沿つた作りを試行錯誤しています。  
混乱させてしまうかもしませんがお付き合い願います。

?【一度は考えて物を語りべし】

肌寒い季節が通り過ぎ、穏やかな日差しの暖かな日々がやつてきた。

駅から徒歩10分。

我が大学は理工学部・建築学部・経済学部・文学部・社会科学部などなど、理文含めて幅広い学部が売りの私立大学である。立地で言えば都会に近くも土地の広さを求め丘の上にあることから、幾分離れてはいる。けれど30分圏内で街中へと移動できるため、生徒には不便を感じさせるほどのことはない。

大学内の施設も研究施設から蔵書の幅広さが評判の図書館、点在する食堂のリーズナブルさに改築を重ねたとは言え近代的な修学施設と私立としてはまあまあの充足感で大学ライフを送ると人気の学校である。

ただし心臓破りの坂と呼び名の傾斜の坂が唯一のネックであり、徒歩での遅刻によるスピードダッシュは受験疲れで衰えた学生にとってはきついものだつた。

また、道路を挟んで向かいに位置する美術大学は華の宝庫と名高く。一躍センスが高い美女が多いと近辺では知られているので、男子学生的に出会いの幅は広がり夢が見られるという話である。

運命的な出会いを夢見る程幼くはないが、目の保養には確かにで合コンに精を出す男子諸君を馬鹿にする気はない。

誘われて暇であれば顔を出すし、狭き門をくぐり抜けた彼女・彼らは話す分に面白い性質であり。

ワタルとしても社会勉強の一環として、友達付き合いを重ねていたのだった。

春学期が始まって一週目のある日。

見事希望のゼミに合格を果たし、顔合わせという名の食事会を経て顔見知りが増えた。

新たに知り合つた女子生徒に請われるままバイト先を教えれば、昨日ウェイター姿をからかわれにやつてきたのを苦笑して相手にした。ここに最近とある理由により心身ともに疲労が蓄積していた身として、ああいうのは勘弁してほしいものだが。折角やつて来た友人に当たる訳にもいかず、その結果より気疲れ分がたまたまつた。

まとまつた睡眠もそれぬまま講義に顔を出し、いつの間にか船を漕いでいた肩を友人に揺すぶられて気付き。

昼食の誘いに伴立つて移動しつつ話に華を咲かす。

情報誌の話題がどうだとか、駅前の短大のどの子が可愛いとか、ありきたりの話題。

その最中ふと田を引いた、学生専用の校内掲示板に張られた用紙をつい立ち止つてしまじまじと眺めた。

埋めつくされるように張られたサークルの勧誘ビラの文句の中で、一際魅かれた理由はその大々的に訴えられた“急募”と“ルームシア”という言葉だ。

今時の女子大学生が書くような丸っこい文字ではなく、線が細いながらも字体の整つた清廉な字。

端的に書かれた物件情報に、シェア条件。間取りと周辺の情報などなど必要とわかる情報がちゃんとまとめられてわかりやすい。

また女子アピールの無駄なキャラ絵やマークが一切なく、不動産のビラのようにスッキリしていながらも受け取る方が理解しやすいようつきを回されていた。

女性のみ募集と条件づけていることから、連絡先の秋本といふ名字の人物は女性であるに違いないのだろうと知る。

こんな講義が始まつて1週間と微妙に入つた時期にこんなものがあるのだろうから、急募というからに突然のことだつたのだろうか。

「…」の秋本つて、あの秋本かな

いつの間にか食い入るようチラシを見ていた自分の背後から、顔を出して眺めた友人こと唐沢亮一からさわりょういちが意味深に告げる。

同ゼミで興味分野も似たり寄つたりなため、よく共に過はしている仲間内の一人である。

肩越しに振り返つて見れば、思案気に同じくチラシを見ていた。

「この子、有名なのか？」

「有名っちゃん有名。可愛い顔して寄つてくる男を千切つては投げ千切つては投げて無関心を突き通す、通称“黎大のモーゼの十戒”」

「ずいぶん『』『』のあだ名だな」

思わず苦笑する。他人様の話題には皆飛びつくものなのだなあと言わずに胸中に留める。

亮一は気安い性格で男女関係なく付き合いやすいのだが、思わず女子かと言いたくなるくらいに耳年増で大学内の話に精通している。女性に対し大学生一年生になつても幻想を捨てきれない性分であるため、潰えたお付き合いは片手を超えたらしい。

「ほんとさあ、男だけ親の敵みたいに見られんの。入学当初のサークル勧誘じゃこそつて狙われたらしいけど、絶対一步分の距離には入れさせなかつたらしいし。無理に入ろうとしたら田吊り上げて逃げられて、遠田からでも避けられ続けるつて」

男子高齢ちゅえに現実を認めたくないのか女子の負の面を田の当たりにしても何のそのという性格だ。

男であるとだけで目の敵にされるその子が理解に難しいのか、眉根を寄せて首を傾げていた。

「パーソナルスペースに興味半分で無理矢理入る方がおかしいだろ、ふざけてやつたにしろ謝罪して良いくらいのことだと思つけど」「弄り倒そうとしたら公衆の面前でこそトトられたらしいし」「我が強いな。クールじゃん」

「人付き合い苦手でよく一人でいるけど、同性にはそれほど嫌われてないみたいだし。良い子つちゃ良い子なんだうな」

「ふーん。性格に問題ないカワイイ子ちゃんでも、鋼の男嫌いか」

「あと、又聞きしたのだとそこの大美の柏谷ちゃんと仲良いらしい」

「柏谷? つてあのモデル風美人さん?」

柏谷ありさと言えば、入学当初からこの一年話題に上がり続ける近辺の学校で美人と命題される女子生徒である。

頭の先から足先まで整った八頭身のパーフェクトパーティが目立つ、伸び伸びとした性格で誰に対してもフレンドリー。

美醜云々の話題は良くも悪くも昇っては立ち消えやすいといつのに、我が大学では日々懸想する男（少数派で女も）は絶えないとか何とか。

毛先にかけて重いウェーブののつた栗色の髪の美人さん。服のセンスも良くて、学校でも交友の広い人物らしい。

そんな人物が、知らぬ間に話題となっていた人間と仲が良いとは。ますます以てその秋本という子に興味が湧くというものである。

「なあ、その秋本って子の顔わかる?」

「ん? そりやわかるよ、同じ学部だし」

「なんだ、こりやチャンスだ」

けらけら笑いながら、その手の込んだチラシを丁寧に掲示板から剥がして言った。

背後で正反対に重苦しいため息を吐いてみせた友人は、そんなワタルを不気味そうに見ていた。

「…ワタルさ、パーソナルスペースの侵害がどうとか言いながらやるうとしてること、結局同じじゃないのか？」

「部屋に困つてるのは事実。それに、とつかかりくらい作つても良いだろ？本気で嫌がられて仲良くなれないなら近付かないさ」

「…………もし仮に、マジでシェア出来たなら焼き肉奢つてやるわ」

「マジか。言質とつたぞ」

「安全域なのは確かだけどなあ」

周りの女友達と一風変わつたらしい子。

精々頑張れーと氣の抜けた応援を亮一に貰いながら、所詮無理だと見られたのをどう打開してやろうかと思つ。

普通に話せるものなら、きっと自分にとつて氣楽な子だろ？と思つ。久々にわくわくする話題であるので、自然笑みが浮かんでくる。隣りでその様を見ていた彼は、変な導火線に火がついたと横目に見るばかり。

だから、思わず。

「もしかしてカレシと上手くいかない腹いせ？」

「そんなどつちにも失礼な」としませんから

いらぬ一言を発した隣人をジロリと横目にする。

普段明るく能天気な顔と評される自分がぶすっと睨んでくるのは、やはり思うところがあるらしい。

自然と彼の背筋が少し張りつめたのが見てとれ、眉を寄せて悪い悪いと謝意を重ねられた。

口の慎めぬ友人とチラシ一枚とともに、今なら昼食と摂っているかもとの情報にワタルは当の目的である食堂へ足を急がせる。

別に可愛かろうが素朴だらうが顔の美醜の点はどうあつてもいいのだ。

ワタル自身にとつては、そういうた垣根さえ関係ないと言い張れる根幹の部分が世間一般とは異なるのだから。

(いい加減、ユキに鬱陶しく見られるのもつらいからなあ…)

憮然として無言に見続ける腐れ縁の顔を思い出して、陽気な亮一に知られぬようにため息を吐いて気を紛らわす。

養われた直觀に従うのもありである、と気持ち軽く検討をつけて。行き交う人波の流れに乗つて、手元のチラシに目を落とした。

食えた学生と忙しない調理場で賑やかな昼の食堂。セルフサービスの食事片手に席をとつて座れば、田ざと一亮一はすぐさま秋本なるチラシの主を発見してくれた。

肩を超えた辺りで切り揃えられた黒髪は無難に首元で一括りにされて、細くて陽に焼けていない白いうなじが見てとれる。肉付きの薄そうな背中はピンと張つていて、姿勢の良さに好感が持てた。

武道を習つていたこともあって、どうも最近の視線を集めめる系の女の子がする仕草から凝り固まつたような撫で肩だと重心のズレだとかが、変に気にかかるのだ。歳の若い女性ならではの、小首を傾げたり胴体を反らす仕草は小動物のように可愛いらしく、けれど身体に無理な不可をかけてまで異性に訴えることかと考えてしまう。

特に口に出したことはない点だけれど、ワタルが思う“秋本さん像”として興味がより魅かれた事実となつた。

多人数対面の大机ではなく、窓際に面した個人席に一人友人らし

き人物もなしにかけており。

時折窓の外の景観を眺めながらゆっくり食事中らしかった。

この食堂は窓の外の植え込みと道路を挟んで、隣りの美大に面する造りになつていて。

端に位置することや大学に関係のない門外漢も気軽に訪れる仕様になつてゐるため、時折その美大生らしき集まりや周辺に住む主婦たちが食事に来ている場面も目にすることがある。

そんな彼女は、喧騒の中大衆の意氣に気詰まりせず、身を縮こまらせることなく。

ただもくもくと腕を動かしては、道路脇を歩く人影を見ているようだつた。

観察しながらワタルも食事を進め、正面に座る亮一の、秋本なる人物の所属するゼミの友人から聞いた噂話を又聞きした。

生まれはこの都市部から電車を乗り継いで2時間圏内の、幾分賑やかな郊外地区で（どうでもいい）。

兄弟はおらず一人娘（一人っ子にしては自律したものだと思う）。時折柏谷ありさと一緒にいる所を見かけるとのことに、あつさり中学校からの友人だと判明（へえ、と呟くと反応が薄いと睨まれた。だつてあまり興味がない）。

顔立ちは整つており、つんと上がつた唇に、少し目尻の上がつたくりりとした茶色がちな黒目は愛嬌があるがそれを見るのは稀だそうで。

艶のある柔らかな髪質の黒髪だがヤマトナデシコなるものではなく。ゼミが同じでふざけて告白もどきをした男を一月無視し続けた逸話持ちの腹持ちありの性格。

ゼミ内では教授の覚えめでたき真面目な生徒（プレゼンで下調べを重ねた論破に、これからが楽しみだと教授が称賛したこと）。1年目に大学が標準に沿つて配置したゼミから、そのまま2年目も同教授ゼミに持ち上がりのまま師座するそうだ。

ゼミの女子内の評判は甲乙つけどもなく。

我を張った高飛車な性格ではなくて、単に軽度の人見知りがある普通の女の子と認識されている。

件の男子生徒は本人が笑えぬ冗談を言つた結果だとして全面的に彼女の味方。

女友達同士は付き合いの悪い彼女を飲み会に引っ張り込むのに、あの手この手と使って彼女を引き出そうとするくらいなそうで。

なんだ、とワタルは人称像に当たりをつけた。

「ふつーに良い子なんじやん」

「……ちゃんと聞いてたか？」

途中から脱線してどこでこの男がこんな文句でフラれただ、やれあの先輩がひつきりなしに追いまわして鬱鬱をかっただと知つて得することのない話題は端から聞いていなかつたので、亮一を黙殺してワタルは続けた。

「おつとり口調で男の人と喋るの苦手ですーとかにこにこして嘘吐く訳でもなく、男嫌いだけど共学に通つてゼミの教授だつて性差で選んではない。女友達に特別愛想まくまでもないけど気に入られてるし、一年経つた今じゃ新生ゼミ内はつつがなく良好関係継続なんだろ。全然問題ない」

「ただけど、噂になるくらいの男嫌いだぞ? 端から男なんて除外なんて思われてんだぞ?」

「飲み会で男友達と世間話くらいは出来るんだから、寄つて叩く陰険な誇張話じやないの? 傷害罪で訴えられた訳でもなしに」

「俺ワタルくんの見解に圧倒」

なまじ飲み会で女子アピールに呑まれたこともあるだけに、友人はワタルの考えになるほど一などと零している。

しかしこうは言つていても、この男はその性格ゆえに肉食系と世に言われる女性陣に呑まれるのだろうと頭の隅で思つた。

頭ごなしに亮一の女性觀を否定するほどワタルも自らを出来た人間とは思つていないのでケチはつけないが、無自覺の強かさが彼にはあるので想像は放つておく。余計なお世話だろう、と。

「うん。友達になれそうなタイプだ」

「…そりや、ワタルは垣根なく飛び込んでやえる羨ましい性格だけどや」

「亮一だつてそうだろ」

「俺はお前の社交術を見よう見まねしてたら性分に合つただけ。お前より素直とは思つけど」

それは自分が腹に一物飼つていると暗に言つてゐるのに等しい言  
い方と表情だつたので、ワタルはうん？と語尾を上げて笑つて見せ  
た。

案の定冷や汗をかいて何にもないです、と固い笑みが返つてくる。

全く失礼なことである。

自覚無自覚どう違えど、裏表使い分けるのは人間の本質だ。世には  
その表裏が紙一重な人物もいるだらうが、今は問題ではない。

すっかり食べきつた食器を前に「ちやうさま、と手のひらを重ね  
合わせ。

机上に置いたままのチラシをちらりと見やる。

黒の印字で、左下の隅に存在を誇大することもなくただ在る綺麗  
な字面。

幼い頃通つていた実家近くの習字の先生が朱色で花丸をくれそな、  
お手本ものよりは柔らかい筆跡。

字からも、後ろ姿からも。

感じ取れるのは、婉曲することなくただ真つ直ぐな性分であるとだ  
け。

一年目は存在こそ知らなかつたが、新しい交友関係を築ける人間  
ではなかろうかと思うと久方ぶりにわくわくする。

これまでわが身の事情で精一杯だつたけれど、生活を新たにした此處での一年は充実していたのだから。

今さら女だ男だ性別云々かんぬんという考へてもどうにもならない問題は、ワタルにとつて背後の振り返つた先である。

（同族とまではいかないけど、所縁があるのは事実なんだ）

カタン、と椅子を押して立ち上がつたワタルに浮かぶ笑みを悟り。亮一は呆れ氣味に、茶を飲みながら口を開いた。

「俺、秋本さんが可哀想に思えてきた」

「ただ見目が良いつてだけで突撃する輩よか、性根に素直な俺の方が人畜無害」

遠巻きにちらりと彼女に視線を向けながら歓談するあちこちの男たちを見て笑みを深めれば、ワタルほど一面性が読みにくいうのを無害とは言えないと小言がくる。

そんな奴と毎度毎度連れ歩く亮一こそよくわからないけど俺は楽し

いで、と返せばとつとど行けどばかりに手が振られる。

「骨は雪弥と拾つてやる」  
「俺が埋まるのは実家だけだから」  
「…蠟燭線香代わりに束ねて燃すぞ」  
「新築の境内プレゼントなんて友達思いな奴だなあ」

「黙つて行けッつの！」

やややかな友情を確かめ合つて後ろ手に、件の彼女へと一步一步近づいてゆく。

曇りガラスで顔はわからないけれど。きっと、噂を呼ぶほどには可愛らしいんだと思つ。

特に気になつた点ではないが、顔を見合させて話がしたい。ただそれだけの欲求。

（あわよくば、家賃光熱費折半7万5千のセパレート好物件が手に入るかも）

日々放り出したままの問題に着手すべきは己の方で、ベクトル違の同族染みた興味本位が本音で搔き入つて良い訳ではないと解つては。いるが。

（何か、縁を感じるんだもんなあ）

通路の邪魔にならないよう机に身を寄せて。彼女との距離は話すに難くない2歩分の位置。

ふつと過ぎた人影に彼女がこちらを仰いできたのをこつこり笑つて、チラシを掲げる。

「秋本さんだよね。このルームシェア募集を見て来たんだけど、話良いかな?」

声をかけ、目が合った矢先のげんなりした顔と、宙に止まった箸。固まつたその表情が、思わず腐れ縁を思い出させて笑いたくなる。

(…これは、話違わず難度が高い)

剣呑な雰囲気を隠しもせずに眉間に皺根を寄せる親友と同属だと判断をつけ。

チラシをぴらぴら揺らしつつ、初手に挑むつもりで笑みを浮かべる。

( 仲良くなれる。コキも氣に入るわ )

大学一年目の春。これからが盛りである。

?【一度は考えて物を言うべし】（後書き）

おまけ【亮一・談】

（人畜無害、なあ…）

亮一にとつて、ワタルは気兼ねなく付き合える仲間の一人であり。第一に入学式での隣席が初年度配置の同じゼミにいたというのだから、彼は大学入学後の初めての友人と言つてもいい存在なのだ。本人はどう思つているかはわからないけれど。

（そりや知り合つて1年しか経つてないけど、あの笑いを人畜無害と思えるほどには目腐つてない訳だし）

頭を占める当の人物は、噂の花形の傍でにこにこ無害と謂われのつく笑みで立つている。

己が入学後、縁のなかつた同年の女性への振る舞いとして、ワタルを真似たのは事実である。

そういうつた内情に変に敏い彼のおかげで、表立つて相談することもなく所々で見られる気遣いを他所で実践することで華々しく大学デビュ－を飾つたのだが。それは今はいい。

しかし、まさか同年齢といえどその世慣れて見えた男がビックリ箱的なネタを力ミングアウトした時。思わず、『高校ん時あつたなそんなことも…』と歯牙にも欠けず言い放つた故に、初めてワタルの大爆笑が見れた要因となつたのは内心自慢である。

常に笑みを浮かべる印象だが彼の爆笑はわりとレアだ。笑いの種に

なつたとはいえ、事情ゆえか世間を斜めに見て居る彼が同年代の男らしくなつた起爆剤と思えば安くないと亮一は考へて居る。

（あの雪弥と一緒になつて大物がいたと言われたけど、あいつらろくに聞いてくれないしなあ）

あいつらと一括りにした2人以外のつるみ仲間の同輩の顔を思い浮かべつつ、話題が話題なだけに他所で明るみに出来ないし。する気もないのだが。

（あいつもある種の噂の的だけど、その点は大っぴらになつて本人があの様だし）

友人が落とした爆弾発言に、無愛想で喧嘩腰だつた彼女もあまりの突飛さに茫然としていた。  
なんとはなしに同調したい心地である。

（…一回、あの切り込み隊長的な笑みが墜落した所を見たいと思つあたり俺も、大概毒されたもんだわなー…）

公共の場で陥落した発言による静まり返つたフロア内の一帯。

亮一は、これから大学中を回るであらう噂の的を横目にしながら。茶を啜つて呑気に眺めるのだった。

「ヂ!ヂ!ヂ!..??.男は敵と貶して名高い女に言ひ寄つてきた噂の変人は」

栗色のハーフアップにした髪を揺らしながら、肩掛けのバカに大きい帆布地の頑丈な鞄をドンっと机に乗せ。

きょろきょろ辺りを窺い見る、問題の渦中に在るはずの人物が面白半分に目を輝かせているのを腹立たしくアキは睨み。目立つと自認する華やかな彼女の腕を引っ張つて座らせ、重いため息を吐くのだった。

とんでもない話題をその当人から投げ込まれ。関わらざるをえない状況にされた、あの日。

例え自慢にならない経験を踏んだといえど、アキ自身は平和でありふれた生活に身を寄せる唯の二十歳間際の女であつて。

突然、顔見知りでも何でもない初めて会つた男から。自分は女ではなく男が好きだとカミングアウトされて。

頭は大丈夫かと、呆気にとられない方が可笑しいだろう。もしくは日々度肝を抜かれて突拍子もない人生経験を踏まえる大層な御仁なら、その意見は適用されまいが。

類を見ずアキ自身も数十秒力チン…と、固まるしかなかつた。幾度も幾度も頭の中で言われた言葉を反芻し。意味をかみ砕き。何かの間違いか?とこちらを見続ける男を凝視し続けては自分のなかの常識と照らし合わせ。視界を何度も過ぎる紙によつやく我を取り戻し。

とりあえずその理論はおかしい、と一言告げた。

「いくら貴方が男が好きだからって、それは彼女候補になりたくもない私が汲む所じやないし。ていうか貴方のこと今日初めて知つたし。性別で差別してしまうのは、申し訳ないけど事実だし。襲われなかろうと性欲の対象外であろうと、貴方が私の嫌いな男性である事実は覆らない」

だから」「めんなさい」と田礼していつの間にか動きの止まつたチラシを返してもう一つべぐく掴む。

掴むが、思いのほか力が強くて抜き取れない。

細身なわりに力があるようだと、余計なことまで思い出してしまつ事柄に思考を掠めそ�で。

慌てて田の前の男にピントを合わせるべくアキは男を仰ぎ見た。

ふつ、

見た途端。気の抜けた音がして。

「……えい、笑つ原因があつたの？」

くつくつ噴き出す笑いを押し込めるよつて上半身を折り曲げながら。

それでも收まらないのか、身体を小刻みに揺らして声を堪える彼の姿があつた。

器用にも、チラシに皺が入らない程度の絶妙な力加減のままでいるから。

余り力を込めるといつも力作の要旨が破れそうで、アキは思い切りがつかないでいた。

「…………」めつたつて、そう、返つてくるとは思わなくて……」

「

少しばかり浮いた顔を見れば、なんと目尻に涙まで浮かべている。アキはと言えば思いつきり面倒な心地でいるのに。何とも樂観的な男だと半眼でそう、とだけ冷たく返す。

「この男は實際何が目的なのか疑問に思う。

ただ部屋を探したければ、子供じゃないのだから不動産屋を巡れば良いのだ。

わざわざルームシェアで同居人が女なのを物珍しく見て声をかけてきたにしては、世間一般的の価値観から外れて位置する性癖を公共の面前でひけらかすなどと冒険も良いところであるし。

昼時の学生食堂で言つぐらいだから何かの「冗談か、もしくはくだらない度胸試しか。

色々思惑を想像してみたが。

なんとなく。

アキには、この軽く見えて物腰の落ち着いた男が中身まで軽薄そうには見えなかつた。

ふう、と吐息を一つして落ち着いたのか半身を上げた男は、スツール一席分を間に置いて腰掛けた。

(…チラシから手放せば良いのに)

幾分引っ張られる形で腕が伸びたまま、アキは内心首を傾げて相手の出方を待つた。  
お気に入りの、温かな日差しが入り込む窓際では。色素の薄い彼の髪は少し眩しく煌めいていた。

「きなり笑つて」めんね、と前置きをして。

彼は困ったように片側だけ器用に眉をあげて口を開いた。

「あのね、住む所に困つてるのは本当なんだ。今まで住んでたところも実はシェアしてて、同居人と喧嘩して放り出されてさ。今は友達の家に居座つてる」

「…？ 仲直りできないの？」

「一方的にばっさり。連絡途絶えたわ家行つても居留守だわ腹立つわでここ半月最低な気分。そこまでされちゃこっちも謝るのは癪で、居ない間に荷物だけ貸しコンテナに移して転々と。賃貸用に金溜めててバイトも休めず時間作れなくて、隙間にネットで部屋探そうにも手続きその他と取れる暇がない」

「……お金の事情は置いといて、家見つけられないのにバイト入れられるつてちょっとひどくない？」

「新規オープンしたばっかの繁盛してる店に、知り合いの伝手で入

つたもんだから顔に泥塗りたくない。もう一円すれば楽になると思うんだけど、いくら友達だからって居続けるのも悪いし恐いし安眠出来ない…」

聞く限り、シェア相手が不義理過ぎる気がするが事は他人様の事情である。

話し続けては気落ちして暗い顔になる正面の人間に、初めて会ったのに思わず同情してしまつ。

すきすきと痛み出す頭を片手に、私も事情は事情なのだと切り替える。

絆されて住めば都の我が家を台無しにする訳にはいかないのだ。

「友達に、家探しを任せた訳にはいかないの？」

「……俺、言つたと思うけど自分家に誰かあげるのって人災に関わらない限りダメ。シェアはシェアで領域が分かれてるから納得出来るんだけど、家主が上げるの嫌がつてるけど家探してねつて人してどうだろう、」

「……まあ、そこらへんの事情が理解できなくもないけど。切羽詰まつてるなら頼むしかないんじゃないかしら」

「切羽詰まつてたら丁度よく掲示板にこれがあつた訳なんですが」「一先ず、シェア相手の先方と話をつけるのが先じゃない？」

中途半端なままじゃいられないでしょ」

「……原因が痴情のもつれなら話はわかるけど、俺には全く覚えがないんだ」

思わず振った話題に対しても飛び出た単語にひくり、と口の端が引き攣った。

またつきり、と頭痛がひどくなる。

「……相手、恋人？」

「うん。社会人。深夜業のバーでだから思いつきし学生の俺と生活反転してんの。問題なく続いてたし本人とも気が合ったもんでも枠超えた覚えもないし、本気で日中夜問題が抱めない」

（…なんで私、恋愛相談みたいな相手になつてるんだら？）

話が転々と移つて、感覚は麻痺していた。

性癖は本人たちが納得の上ならばそれで良い。

勝手に自分の人生なんだから謳歌すれば良いのだ。ホモだとかどうでもいい。

然したる問題は住居だが、暇がないという話も解らない訳ではない。

進学校として評判の女子高を経て奨学生で入学した身として、毎日の授業に気が抜けない真面目な毎日を送っているのだ。半分でも高い授業料を払つてもらつて都会へ出てきたのに、手前勝手な理由で講義を休めない。

彼の話の内容は真実なのだろう。

距離が身近になつた分と陽が差して明るい分、疲労感と不眠による隈と頬から細い顎へのラインが若干窪みつつあるのが窺い知れた。

症状は軽くとも、わが身にも身に覚えがある状態だった。

世間が思つほど広くないということを、アキは知っている。

そして自分が、ある種こいついう“放つておけないタイプ”に極端に甘いこともアキは自覚済みである。

何を隠そう親友のありさが良い例なので、いくらバイタリティ溢れるうら若き元気な世代といえど食べるものを食べねば活力は衰えてゆくのだ。

安眠出来ない環境が辛いものとはわかるし、友達といえども遠慮しながらの生活を理由分からず追い出され強いられれば、不憫と言うに他ない。

ルームシェア一年目当初は、入つて間もなく課題に追われるありさがやつれるのが嫌でかなり無理矢理言い聞かせた覚えがある。少しくらい無理しても平氣だと黙つて忙しくせに働くと言う彼女と軽く喧嘩した覚えもあれば、熱を出して倒れた姿にそらみりと言つて顰蹙をかつた覚えもある。

今では朝晩と栄養の摂れた食事提供を踏まえ健康体になつた彼女が生活習慣を正すことに納得して、あの頃は若かつたーと冗談紛いに言える程に落ち着いたけれど。

アキはあまりありさの食生活が信用ならないので、彼女に似た天真爛漫な母親代わりに頻繁に家に呼び寄せるつもりでいる。

そんな訳で、食生活のバランスはともかく三食食べてきちんと休むという基本生活が送れない彼にはぐらり、と芯が揺れてしまつのも仕方なかつた。

そこまで考えた所でふと、チラシを掴む彼の手に目を向ける。

骨が浮いた甲は硬そうで、力強そうな手だった。

アキの手なんてすっぽり片手で包めそうな、大きな手のひら。水仕事なのか指先は荒れて、スクエア型に整つてはいるけれどそれが見える爪先。

全体的に細いけれど、関節は太く、何か運動していたことを思わせる。

そんな、男性の手。

ガシリと骨が軋むくらい掴まれる腕。

物を投げるように簡単に吹き飛ばされる、あがらうことなどが出来ない力の差。

背後から迫る太い腕。後頭部に押しつけられる硬い掌。

「あきちゃん？」

ぞわりと首筋が震えて、反射で首を上げれば。

陽だまりの中で、不思議そうに佇む男がいた。

( ) ああ、違う。ちがう。ちがう( )

明るい。

人の気配がある。

声がある。

一人ではない。

私はもう、何も知らない訳じゃない。

息を吸つて、吐いて。また吸つて、吐いて。  
深く、けれど落ち着いて。繰り返す。

大丈夫なのだと暗示をかけるように瞼を閉じ、脳裏の影を払い落す。

目を開いた時、どこか神妙そうな顔つきになつた彼は。  
向き合つていた身体を少しずらして私から視線を外した。

何を思つたからか、わからぬいけれど。

その行為が、少し有り難かつた。

しばらく無言のまま、ただ喧騒を聞いていたけれど。

器に残つたままの麵が延びてしまつたのを横目に、努めて平常に声  
を出す。

「…悪いけど、やっぱり男と一緒に暮らすのは、私には無理

ただそれだけの言葉に、とても労力を使った氣分がした。  
対する彼は少し残念そうに視線を床へ落として、アキに向かって軽く微笑んだ。

「 分かった。断られたんだから、仕方ないね。諦めて自分で何とかするよ」

「 気にする」ともないと思つけど、気にしないでねと一言添えて。  
正面からその温かそうな笑みを受け止めることが出来なくて、少し視線を合わせてすぐにそらし、いくつと頷く。

未だお互に握り合つたままだつたチラシの内、片側から手が外されて。

自然とアキの手はその紙一枚を片手に、力なく下ろされた。

手元に返つてきたチラシは、自分の触れた側だけが無造作に皺が入つてしまつていて。

何とも半端に見苦しい様が、喉元を聞えさせた。

新しいもの用意するのも時間がないし、コピ一すればマシかと気を遣る。

「ねえ、あきちゃん」

まるで聞かずつもりがなによつた小声で。けれどしつかり耳に届く低音は、穏やかな響きだ。

老成した人間が浮かべるような、距離を置いて年若を見守つてくれる柔らかな繭の如き笑みを浮かべて。

彼は、眦を緩めて告げた。

「もし、良ければ。顔を見かけたら、挨拶へうこはするよになつても構わない？」

何とも、不思議な男だとアキは思った。

今まで此処にくる前からというもの、寄つてくるのはいつもを顧みず体面から汲もつとしない輩ばかりで。

相対して少し言葉を交わせばわかるものを、よくよく自分に都合が良いようにしかとらない人間ばかりだった。

ムキになるからいけないのだと親友から苦言を施されたから、間を置いて落ち着いて対応していたら軟化しただの茶化すばかりで。

結局は無視という一手に忍くるしかなかつた。

それでも一年此処で過<sup>11</sup>じ、程度が掘めるよ<sup>12</sup>になつても自分の応対は手厳しいのだろう。

愛想がないのは自覚済みだし、関わる<sup>13</sup>とする土台が下心か単なる興味本位にしかとれなかつた。わかりやすく線を引いてみれば、よくよく身近にいた男は当たり障りなく触れる程度で、事実楽だった。

けれど。

（…かなり、喧々と相手してたのに、なあ……）

いつまでもその状態でいけないのは、言われずとも己<sup>14</sup>が一番理解している。

ありさが言つ<sup>15</sup>ことも一々尤もで、反論してもそれは単に応対なのだ。ああ言え<sup>16</sup>ばいい<sup>17</sup>言つ<sup>18</sup>といつ、彼女と自分の間での執り成し。

影を怯える自分を理解しながら、前進するよ<sup>19</sup>うに背を押してくれた、血の繋<sup>20</sup>がりもない彼女。

いつか終わりがくる。共にいつまでも、在れる訳がないのだと。知つてはいたけれど、ずっとずっと先のことだと思っていたのだ。

それでも、震えてしまつから。

陽の下に在り<sup>21</sup>と、あの影はいつもいつも、自分に付きまと<sup>22</sup>うから。

(…「れだけ、変わった人とな。……平氣かな、）

男嫌いと知りながら近づいてきて、普通は隠すことを全面的に話聞かせてくれた、変わった人。  
こちらの内情がわかる訳もないのに、許容できるわざわざのラインを押さえて、踏み込んできた人。

（…いきなり電話番号聞こいつて訳じゃないんだから、よっぽどマシよね）

今度は視線を反らすことなく、泰然と見つめてくる髪色のわりに濃い茶かかった瞳。  
見返して、何故か思わず苦笑してしまった。

「 久尾坂くん、だっけ？」

「ワタルで良いよ、微妙に呼びにくいでしょう」

飾り気なく、コウサカーとか聞こえるから自分じゃないみたいなんだと彼も苦笑した。

初めの勢いと打って変わって、どこか伸び伸びしてこの姿に此方の方が素なのかもと感じじる。

「男だつてことは弁えてるから、そんじょやういらのやうぢやと同じ対応は悲しいのでお願ひします」

「挨拶くらいでしょ？」

「どいか反発したくなる言い方に、こんな簡単な“お願ひ”をされたことは初めてだと気付いた。

どうにも変わった男で、思わず呑まれた感がする。

こちらの内情を察することもなく、彼は圧迫感のない素直そうな笑顔を浮かべて言つた。

「あきちゃん呼び、構わない？」

「名前だしあだ名みたいなものだし、ふざけて連呼されなればどうぞ」

「光悦至極有り難く」

「何その仰々しさ」

「寺の息子はお行儀良いのや」

ぽんぽん打つては響くつた言葉の返しこ、やはり親友に似たタ  
イプだと内心頷く。

どつと疲れた気分だけれど、何とも言いにくくい収穫があつて。  
その代わりに胸中に宿つた、彼の事情に対する申し訳なささがどう  
にもしごつのように残つたのを無視して過ぐし。

その日を終えたのだった。

あれから3日後。

アキの機敏に敏いありさの猛攻に合い、白状した所何故すぐに教え  
ないのかと喚かれて。

翌日は月曜だから何が何でもその好青年の顔を拝んでやるのだと息  
巻いて、食堂での約束を取り付けられた。

約束を無視すれば、それ相応の見返りがくることは知つていてるた  
め無碍には出来ずにはこの無駄に派手な親友と並んでいる始末。

いくら大学内の話題に疎いと言えど、この一年で何十人もの学生や  
社会人がありさに当たつて砕けた様はアキが一番知つている。

学生は黎大を言わすもがな、美大でも駅前の短大でも。

果てには都市部にある公立の人間がわざわざアタックしに来たこと  
も知つていてる。

結果は言つまでもなく。ありさは歯牙にも欠けず今は課題と友情で  
手一杯と言つてはごめんなさい。

何人かとは出かけたが、肩をぐりぐり回しながら親父臭く帰還して  
は『お勤めから帰つてきたぞー』と雪崩れかかってきたのでお眼鏡  
に適つた者はいなかつた。

服だ小物だのセンスが合わないとか、あの店のチョイスは間違っているだと事細かに話してくるので諸事情は簡抜けである。

男性がこぞつて魅了されるのも分かりやすい容姿であるため、納得は納得だが。

賑わった館内で注目されるのを避けてきたのに、毎時じゃないと出くわさないでしょ！と訴えを通されて。

2人窓際にて横に一列、いつもは夕暮れ時に少ない人数の中で利用する場所を陣取る羽目になつた。

（視線が刺さるへりこつて言葉ほど、あつた合ひてる言葉はないわ…）

座れば並んでアキにもあやつぱり、ヒツツの視線。

ありさが歩けばふらふらその後を追い、首を巡らせてアキを察して成程という視線。

気にしてちゃ生きていけないでしょ、と呆氣からんと呟つてみせる親友は堂々と猥雑で込み入った食堂を歩いてプラスチックの湯のみ一客にお茶を酌んで帰ってきた。

それ待つて、アキは手早く作ってきたお弁当を幅広の机に並べて膳を渡す。

「～～～うはー！花見ぶりのアキのお弁当～

「つー一週間前じゃない」

箸と引き換えに渡されたお茶を端に置いて、明るい笑顔を振りまくありさに苦笑が零れる。

月曜に昼ご飯！と言わされてからは、事細かにおかずの希望が挙げられたためほとんどがありさ好みの内容になっている。

いつものホウレン草の卵焼き、レンコンの歯ごたえがある鶏だんご甘酢和え、春雨と錦糸卵とキュウリのサラダ。

小鯛の照り焼き、菜の花のカラシ和え、タケノコとそら豆の蒸し煮洋風味。

手毬型のおにぎりの中身は鮭と人参菜の炒め物とオカカが少しづつ。近所の公園へお花見に行つた時に出したおかずが大半であったため、気に入つたようだつた。

まとまりに欠けるが、夜食用に惜しがるのを見越して変わり種をタッパーに入れてきてある。十分だらつ。

「あ、この肉だんご中身違つじやん。うまつ」

「前教えたやつにレンコン刻んで練つただけ。出来るよ」

「その練つてからの工程がいさか面倒ねー」

教えた際に陶芸みたいと笑つて練つて丸めてと面白半分に遊んだくせに何を言うかと思つたけれど、自然に流した。

朝はきちんと食べているらしいこと、一週間経つたにしほり活出來てるから余裕余裕と話す言葉に時々返して箸を進める。

あまり心配し過ぎることもないけれど、こうしてまた週一に昼を、週末に晩を過ごせば兆候は押さえられるだろうと考えて。

新生ゼミの内容や課題の話をしながら食欲を満足させる。

いつもよりも人口密度が多いような気がする食堂内を、週明けで

多く見えるだけだと無理矢理納得させた。

曇りガラスは窓の反射を抑えるが、向こう側の歩く人間たちは透けて見えるのでこちらにありさがいようと気付かれない。

わざわざ覗きこまれることもないのに向こう側の世界は平和である。ざわめいて所々に稀に聞こえる柏谷といふ名詞を聞かないふりして中身を片づければ、ぽんぽん隣りから肩をたたかれた。

「なに？ もう良いの？」

「違うわよ。例のコウサカ？ ワタルくん？」

「違う、久尾坂」

「まどろっこしいなあ、 で？ 彼いる？」

少なからず、このきょろきょろ後ろを振り向く動作もざわめきを高めるのに効果がでているのだろうと当たりをつけ。心持ち慎重に辺りを見回す。

見渡したフロア内は同じような学生で一杯で、3日前に見たとは言え同じ人相を探し当てるにはアキにとつて苦行で。嫌々ながらも当たり障りなく眺め、いないと判断付ける。

「今日は来てないみたい。もしかしたら此処じゃなくて西館の方かもね」

「ん~、まあこんな広い学校ですぐ会えるとは思ってなかつたけどわあ。ざんねーん」

しょぼくれたありさに食後のイチゴを出して勧めれば、わーいと礼を言われて2人で摘み合つ。

「　　んでもさ、『んなど』で普通に口に出すつて勇氣いるよー？」

大物か勘違い野郎かどつちかねえ、とありさが足を組み替えながら言つのに同意する。

「誰が聞いてるかわかない場所で、いくらあたしに訴えるためつて言つても。驚いた」

「今でこそ団体とか表立つてきたけど、偏見は多いし。影でこそ人は生き生き言い合つもんだから、共学で私立であちこちからわんさかいろんな価値観集まるつて言つても度胸持ちには違ひないわね」

「……うん、友達多そうなタイプだつたし。底抜けに明るいかどうかはわからなかつたけど、人好きのする雰囲気の人だつた」

「しかも初対面だけど懇切丁寧に事情までご披露してくれて、あげく恋愛相談染みた会話…」

「あたしも麻痺して色々突つ込んで聞いちゃつたけど、嫌々つて風じやなかつたし。普通に相手好きなんだなーつて思った」

「……うー、もつすつごい氣になるわね。人生観とか語り合いたいわ」

ステイックをかじかじ噛み締め、口惜しそうにありさが唸るのに苦笑にする。

思い返せば昼休憩のわずかな時間だつたけれど。

彼は惜しみなく事情を聽けば話してくれ、他人の自分にとても心を碎いて接してくれた。

自分のことに対し重きを置かないのかと思えば、偏見による批判を受けてしまいかねない立場にいるのだから大変なことだつたに違いないのだ。

話し終わつた後、立ちあがつて友人らしい人物と去る姿を目にしたけれど。

平手で軽く叩かれては蹴り返して笑い合つ2人の反応を見るにつけ、深い交友関係にあるのだと感じた。

（私みたいに、がちがちに凝り固まつて毎日過ごすんじゃなくて。

陰口があつても、受け入れて伸び伸びしてそう）

あれだけオープンに初対面の人間に話したのだから、包み隠さず聞かれれば答えるのかもしない。

彼にどんな噂が立つているか邪推するだけ無駄だが、いきなり事情に片足を突つ込まれたようなものなのだ。

表に出す気はないが、気になるものは気になる。

（あれだけ整つた顔立ちだからモテるんだろうに、女の子断る時はちゃんと伝えるのかな。いつから男が好きだつて気付いたんだろう。友達はそれさえ知つて傍にいるんなら、そういう違いさえ通り越して一緒にいる魅力を知りあつてなくちゃきっとあんな穂やかには笑つていられないはず……）

黙々と考え込んでは答えを聞くにはやぶさかな問い合わせが頭に浮かぶ。

けれど、自分には彼の要求に応えられないのだ。  
あれ以上突っ込んで聞く気になどなれない。

突飛な情報に煽られて、あの口のあの時間だけが特別だった。それだけだ。

「アキ？ 最後の食べて良い？」

覗きこんできたありさに何も考えず頷き返し、質問の意味を反芻して気付かれないよう息を吐く。

（ う……ダメだわ、日常にないことだったから反応しがちなんだ。もう関係なくはないけど、これ以上は考えるな。踏み込むな）

ありさが舌鼓を打つて味覚を楽しんでいるのを横目に、空いた机上に肘を付いて窓の向こうへ視線をやる。

今日も食堂を過ぎた正門まで、偶に波が途切れてもわんさかわんさか人が通る。  
どの顔も同じようなものに見えて、そんな訳はないのにただ行き交うだけの流れをぼーっと眺める。

「「」ちやうさま…次回は来週じゃなくて、その金曜日こしまじょ」

「おそまつ様……つて、本氣で？」

「あつたり前じゃない。それまでに会つたらちやんと挨拶返してアドレスくらいはゲットしとくのよー」

「何で交換する必要あんのよ」

「今は春よ？麗らかな春、別れの後の出会いの春。そーんな徳の高そうな人の友人ならお知り合いになつてみたいじゃない」

「顔教えたげるから自分で聞きなよ。嫌よ」

「せつかく奇麗な人が挨拶しても良いかーなんて小学生でもしない断わり入れてまで仲良くしようとしてくれてるのよ？その上イケメン？寺の息子？ありがたーいことじょうが。しつかりお付き合いしなさい」

「…タッパー持つて帰らうかな…」

「ちょっとー！？ありさちゃんの素敵な肌がブツブツになつても良いって言うの？この薄情者！」

「もういい年で自活すんだから自己管理」

「ひどい！そんな子に育てた覚えない！」

「産んでくれた覚えもないわ、」

「」

言葉の応酬を重ねていれば、正面の窓が雑談の中で音を立てて揺れた。

（スズメ…？）

にしては力も強いし。何やら影が大きい。

思わず仰いで見ると。

「 ッ！…！」

「 …お？ん？」

話題の中心人物が、曇り部分を超えた所から片手を振つて見下ろしていた。

「 つな、何で…！」

「 うん？うそ、マジで？」

先日初対面の、相手も思わず笑い返してしまつ程にこやか・な笑顔を浮かべ。  
少しばかり頬が上氣しているのは、温かい外気と急にこう配な坂を登ってきたからであろう。

薄手のアーミーグリーンのショート丈のモッズに、メッセンジャーバッグを横掛けにして。

田向の似合口つハイトーンの茶髪を揺りはじめておはよつと口に出した。

「…おーい、超イケメンじゃん」

「……」

いくら挨拶しあうと言つても、こんなド観衆の中で窓を挟んでやられるとは思わず。騙されたかと訝しんでも素直そうな笑顔が返つてくるばかりで、アキは茫然と片肘付いたまま啞然とした。

見かねたありさが放置していたアキの右手を振るとともに「こり」と笑い返して。

ワタルは、満足したのか正門へと歩いて行った。

「……あれは面白いわ。無害そうな好青年っぽいけど、話聞く限り相当なタマね」

「……あたし今後ろ振りかえれないわ、」

腕組みしてうんうん納得しているありさはともかく、背後で事態を見ていた衆人觀衆は好奇な視線でこちらをひつきりなしに見ていると感じた。  
弁えていると言つたのは戯れだったのか。

よくよく句を考えてこのかわからなくなる。

「まあ、あんまり難しく考えなさんな。単に田に付いたから一ってだけでしょ。アキには珍しくてもこんなのが案外普通なんだかい」「それもありさが隣りにいる状態でやるかつて話になるのよ……」「これくらいこの句よ。車で通り過ぎながら右指しで恋語り語彌のへるの馴鹿よつよひ<sup>アシマシ</sup>じやない」

「……されば土台の違う可笑しきでしょ……」

満腹感で少なからず至福な一時が。

一瞬で重いものを体内に抱えた気分で、頭を抱えるアキだった。

(……同情なんかで、決めなくてほんと良かつた……)

? 【女が四人集まれば何ひやひや】（前書き）

会話が直接表現あります。  
わんつと読み進めひやえれば良いのです。

? 【女が四人集まれば何とやらで】

? 【女が四人集まれば何とやらで】

「お、女前と噂になつた男前の彼女～。お話しない？」

「……その噂の出所詳しく？」

「出所を絞めたところでもう遅いからおいでなさいな」

本日の講義を終えての帰り際、二階のカフェ前を通れば同ゼミで比較的親しい南吹耀子に呼び止められ。腕を引かれるまま半屋上に面した店内へ入った。すいすいと席を分けて進む彼女の後ろを歩きつつ、ありさの提示した金曜日を控えた思わずため息を吐く。ここ最近ため息ばかりで、華の女子大生が笑える…と卑屈に思つアキだつた。

昼時の食堂での一幕を終え。

翌日にゼミがあつたため噂の真偽を女友達から聞かれた。

何やら学内ではある種有名な上に、お姉さま系の先輩方からお誘いの舞い込むイケメン具合で先輩後輩ならば誰しも知る人物が。黎大のモーゼこと鉄板男嫌いのアキに誘いをかけた所ぶつた切られた、云々。

モーションを掛けたのが金曜だつたことから土日を挟み月曜はその真偽が問われながら流れたらしいが、その月曜に新たな噂が立ちあがつた。

何と素モテルと謳われる美大の女子大生・柏谷ありさも微笑みかける進展具合で、実は良好？！さしては鉄壁は陥落か？！というお話。

耳聴くなるように噂話を釣ることもなく過ごしていたアキだが、何とも不十分な真実を帯びた話題に重いため息とやつてらんないと一言呟き。

女友達はやつぱり杞憂だつたわね～と、教授の入室とともにあつさり散開したのだった。

毎度毎度学校に出る度に気が重くて、ゼミが終わつてとつと下宿先に帰つてストレス発散として菓子を増産した。  
しばらくの甘味の山に満足し、疲労感とともにぐつすり寝たけれど。やはり一度飛び交つた噂からはしばらく逃げられないらしい。

セルフの売店でカフェオレを買い上げ、待つていてくれた耀子とともにテラス席へ向かう。

所々にいる女子生徒たちの話し声が、どうにも示唆されていくようで変に勘ぐる自意識過剰な部分が居心地悪くさせる。

隅の席を撮つていた、かしまし娘と称される面子の残り2人を（もう一人は勿論耀子である）田にし。  
どうせだからお菓子持つてくれば良かった、と頭の端で考えた。

「あれ？アキちゃんじゃん。よく会えたねえ」

「トイレの帰りに丁度前通りかかったの捕獲したの。褒めてつ・か・わ・せ」

「私は天然記念物か

「何様なよあんた」

一人はのほほんとしたタイプの小林紗智こばやしさち、もう一人は少しきつい言い方もあるが美人で通る中島彩夏なかじまあやか。

アキを含めて4人とも、何の縁か1年度から同じゼミに配属されそのまま転属することもない持ちあがりの女友達である。

彩夏と耀子は面倒だからという理由だったけれど、交友関係は良好な間柄である。

席に付いて一息入れ、紗智が勧めてくれた某ステイック型のチョコ菓子をぱりぱり拝借した。

「で？新たな噂の真偽はどうなのよアキ」

「半分以上は『デマよ』

「その半分以下が気になるところよねえー」

「まさか久尾坂くんがね…」

物憂げに彩夏が遠くを眺めるため、ひょっとして少なからず好意を抱いていたのかと思わずアキはハツとした。

「彩夏？告白が嘘だからね？ぶつた切つた…ことこは切つたけど、恋愛感情どうのこうのはあたし何ら関係ないから」

「そんなの彩ちゃんもわかつてゐるわよねえ」

「え？」

「そりゃ。どうせ前に言つてたルームシェアだかが関わってんじよ？」

「さすが耀子ちゃん」

「じゃあ、彩夏何で？」

「…久尾坂くんは行動が読めなくてここに笑つてただけで煙に巻いてるっていう同年を排除した所が良いのよ。身近な所になつたら妄想出来ないじゃない」

「…」

「相変わらずよくわからんわ、彩は」

「これが彩ちゃんだもん」

三者三様の反応を返したところ、彩夏も踏ん切りがついたのか丸テーブルに向き合つて話に腰を入れた。

「まあ、ちょっと前から掲示板見てた奴ならアキが張つてた物件紹介状知つてるからさ。噂も判別出来るでしそうけど」「この半端な時期に大変だねえ、アキちゃん」「耀子が飛び入りで入っちゃえば？ご令嬢」「私令嬢のポーズとつてるだけでただの小企業の次女ですから。アキが期待させるようなこと言つない」「私も実家通いだからなあ…ごめんねアキちゃん」「ウチは一年契約毎だけどもう結んじゃつたしな、悪いねアキ」「謝つてもらいうことないよ。悪い…ていうか、ちょっとした相違なんだし」

気安い友人たちの言葉に気にしないで、と微笑んで見せれば笑い

かけられた。

「うーん…何とかしたげたいけど、こればっかりはねえ」

「アキちゃん私たち以外ゼミの女子でもあんまり話せてないもんねえー」

「…ちょっと、あの辺のタイプは、時間がかかる…」

「分からんでもないわ。『じりつじりの押せ押せお嬢さんたちだもんねえ』

「寄れば男のネタ話ばっかだもんね。何のために四大入ったんだか」「それは言わないお約束うー」

新生：風見ゼミは経済学部の中でもわりかし社会現象や文化背景を題材に経済を研究することを主体にしており。

50に差しかかった温和な雰囲気の風見教授は、2人の子持ちで家族の写真をこつそり携帯に保存している愛妻家だ。

若者文化に疎いとは言え、人気J-ポップ歌手の振り付けで熱唱できるほどには部分的に固執している（奥さんがファンゆえ覚えたそうだ）。

雰囲気は柔らかくも、一度授業では妥協を許さない真摯さで中途半端な課題は即返却。再び違う課題を提出させてのける程には真面目に取り組んでいる教師である。

一回生の頃からその手腕に揉まれた4人はともかく、新たに入った残りの女生徒たちはてんやわんやなようで。

毎回化粧室で陰口を叩いているのを知っている。

叩くくらいならもつと楽なゼミへ行けば良かったのだと思つが、思うだけでアドバイスしようとは思はない。火に油である。

「それにさあ、梶原くん？ 一回の頃はそれほどでもなかつたくせに、最近垢ぬけたからかあの辺にちやほやされる的になつてちょっと面白いわ」

「ちよつとお、耀子ちゃん？」

「それを言つなら佐々木こそ、特にすば抜けで良い訳じゃないのに西に対抗心燃やしててウケるわ」

「～～～彩ちゃんまで！」

三人寄れば何とやらで、慌てる紗智を手懐けながらも止まらない耀子と彩夏というと…とても生き生きしている。

陰口の種類的にどうなんだろ？と思いつつ、ありさが言つていた言葉にその通りだわ…と改めて同感した。

女性という生き物はいつまでたつても共通の話題の穴掘りに余念がないものだ。

コモニティを設営するためとか仲間意識の表現方法だとか、難しい所に気を遣つたところでそろそろ止めに入る。

「そういえば耀子も、女前ってどうこう意味？」

「お？ ああ、そうだったわね」

「なあに？ それ」

「久尾坂くん？」

「そうそ、アキ…はそんなに知らないか。あんまり同じ講義とつてないみたいだし知らないのも無理ないけど。久尾坂くんの板に付いたレディ・ファースト精神は正しく女の身に立たなきや出来ないって話で、女前って新語が出来たらしいわよ」

「そこまで女性崇拜してる？」

「分け隔てなく優しいことは優しいよねえ。私、前に遠坂先生の講義でレポート運ぶの手伝つた時、久尾坂くん頼んでないのに一緒に

してくれたもん」

「あら、やるわね紗智」

「うふふ。実は大事な用語が抜けてて、教授の部屋で書かせてもらうの頼みたかったって」

「あつさり言つちやうのも流石久尾坂くんね」

「遅れて持つてけばいいのに。正直ねえ」

「まあ遠坂先生の講義、出席点ないわりかし楽な方だから探つてる人多いしね。去年見たけどあの量は運べる気になれんわ」

アツと言つ間に流れる話題に思わず困惑つ。  
レディ・ファースト？正直者？

（……女の子が性的に見れないだけで、私にも話しかけてきたんだから特に苦手ではないのか。でもそれって余計な誤解生む要因じゃないのかしら。それに正直者…？確かに聞けば内情教えてくれたけど、あれは切羽詰まってたからってだけじゃないんだ。ということはやっぱ自分についてあんまり懐に抱え込まないタイプつてことなのか？）

人好きしそうな笑みを浮かべて、老若男女と関係なく優しく接する姿。

アキにとつてほわほわと女性的なものより男性的な父親のような落ち着きの方が目立つて見えたけれど。

よくよく審美眼は疑惑尽きないものだと、温いカフェオレを煽つた。

絶え間なくおしゃべりは続いていて、ふと耀子が零した発言が耳に届いた。

「 そう言えばさ、久尾坂くんが女性に配慮出来るの。女役やつてるからつて専ら尊なつてたわね」

「 …女役、つて言つと?」

「 セックスでの女役つてこと?」

「 彩ちゃん赤裸々つ」

「 恥ずかしがることないでしょーよ。まだ明るいけど単なる言葉。論議と変わらないわ」

「 彩夏こそ男前でしょ…」

「 あらやだアキ、根に持つてたの? あんたは十分男前よ」

「 フォローしてないじやん」

「 まあまあ。… でも、久尾坂くん、入学してからあのカッコ良さですぐ尊になつたけど。もう一つ流れたよねえ」

「 あれでしょ? ホモだかバイだかって話」

「 え? そんなの流れてたの?」

「 あの頃アキ、ほんと付き合い悪かつたもんねー」

「 ジめんつて」

「 アキちゃん選学生つてだけで、毎回大変な講義採つてたもんねえ。ぎりぎりまでP.S.をいたし」

「 後期になつてようやく食事会顔出したわよね」

「 いや、ほんと要領悪くて手の抜き方が分からなかつたつていうか

…」

「 そうやつ。無理矢理一コマ手抜きの出来そつた課題の講義一緒にねじ込んだつていうのに、親友が風邪引いた時しか代返頼まなかつたもんねえ」

手前勝手なお願いをして、休んだのはその授業のみだったのを思い起こす。

毎回出るものだと思っていたためどうにも心苦しく必死に頼めば、レジュメ見るだけでわかるもんを病気の親友置いて来るんじゃない

と返されたのだ。

今考えると、己から踏み込むと思つたのはそれからだつた気がする。半年も同じゼミにいたくせに、少し酷い氣もするが自己内で謝るに終わる。

「アキ寿りはこの辺にして。やつぱ苦手なあんたでも氣になるもん？久尾坂くん」

「そりや…突拍子もなく性癖ひけらかされて安全牌だからシェア頼むつて言われれば、多少氣にするよ」

「おお？じゃあやつぱりその手の話題は眞実な訳か」「頻繁に女の子告白されてるのねえ…何かやなことでもあつたのかなあ？」

「彼氏でもない男が男が好きって言つても、へえつてしか返せないけど。あの顔で相手は男と想像すると、いけない氣分になっちゃうわね」

「あら耀子、妄想癖うつった？」

「別に穴があるんだから突つ込むだけの事実に妄想癖だと言つない」

「……耀子ちゃん？」

「ウフフ。嫌ですわ耀子つたら、いけないっ」

「仮面被るの止めなさい。わりと似合つてるからキャラ付くわよ」

「お褒め預かり誓れですわ。まあ、十分社会適合できてイケ

メンで友達多いんだから。魅力的なのは確かよねえ」

「…あの方、3人ともよく顔見るんなら、知り合いじゃないの？」

「んー？確かに講義はたまに一緒になるけど、大講義が多いから話しかけるつてもねえ」

「福岡先生のゼミ、典型的理系だから話題に出来ないもんねえ」

「あー…確か、西がたまに久尾坂くんの仲間内の唐沢くんと話しての見るわ」

「唐沢くん…」

「ああ！ そういうや見たわ。男子高育ちの典型『ビューワー系！』人が良いけどよくフランクちやうの」

「…細身で、黒髪アシメの、猫系？」

「…皆の衆、アキが男の顔を覚えている…つ！」

「ちょっと」

「お赤飯日和だね、アキちゃん」

「鉄壁も崩れ落ちたが、モーゼの男前」

「…ワタルくんが一緒に帰つてつたから、見ただけ…！」

思いのほか大きな声で、思わず姿勢を低くする。

何やらがやがやと背後が騒がしいけれど、見ない見ないあたしは何も見ない。

ぽふん、と頭に柔らかい掌が当たられて身体をビクつかせる。

「…まさか名前呼びとは。進んでるわねアキ」

「耀子？」

「『めんなさいな、悪ふざけが過ぎました』

よしよしとばかりに撫でられて、温かい体温が離れて行った。

自制出来ずに身体を揺らしてしまつたが、気にしないことにしてくれたようだった。

「だつて、久尾坂つてコウサカみたいで言いにくいし分かりにくい、つて…」

「直々に言われたんならそうしないな、顔だけ知ってるのと比べ

れば会話した」とあるつてのは「一步前進よ」

「そうね。今までゼミ以外で男の名前なんて教授と事務室系統のオッサンたちの名前しか覚えてなかつたんだから。格段の進歩よ」

「アキちゃん、ちょっとでも男の子に慣れると良いねえ。

頑張ろうねつ」

「…うん。ありがとう」

思いもよらぬ言葉をかけられて、気が抜けた。

優しい子たちだと、素直に思う。

有名な男子生徒と知り合いだといつても、鼻にも欠けず。ちょっとばかし、肩を押し上げてくれる。

女の子に対してでも、少しびくつくのだ。前進といつても遠いものだと、上体をあげた。

「でもさ、唐沢くんはともかく久尾坂くんがあの斎条くんと仲良いつて意外な話じやない?」

ネタが降つてきたのか、楽しげに彩夏が話す件の人物。アキが浮かびもしなかつたのは言つまでもない。

「ああ、そうねえ。あの男らしい男性的な魅力のある堅気の斎条くんと、柔軟な物腰だけどわりとやんちゃな久尾坂くんは確かに異質だわ」

「?…よく一緒にいるの?」

「斎条くんわねえ、建築学科なんだよ。学科違つけど、女の子と話

「坂くんと笑って話してるし、無愛想つぽいけど、普通に中庭で久尾すの全然見たことないなあ。」

「あの面子は良くも悪くも田を引くからねえ。えーっと、確か斎条くんと久尾坂くんと唐沢くんに? 大槻くんと、<sup>かずひ</sup>葛くん、立花くん? 」「多い…」

「6人くらい覚えときなさい。2回じゃ一番のイケメン変わり者軍団だから。上級生はそこまでフリーいないし」

「ニシキイロアリヤハシマリ。」

地元一緒？で建築と経済の橋渡しになつてて。唐沢くんが久尾坂く  
んとゼミ一緒で？葛くんと立花くんが同じサッカーサークルだか  
んだかで、そこに唐沢くんが引っ張り込まれた形で？なし崩し的に  
大槻くんと知り合つてつてだつけ」

「……とりあえず、仲良しグルーブなんだねえ」

「西は年下のローランよ」

「マジでうへー」

「あいつテレビ見ながら女子高生上がり立てって良いよなーって私の田の前で言ったのよ。」

何で遅したの?」

お小遣い預戴!! おにいちゃん

「……ないわ……つ！耀子もが

「彩ちゃん笑いすぎ。でも、西くん満更でもなさい

「そう…もう一回言つてみて、とか言われて流石に私も引い

病院の地図プリントアウトしたら妙な顔してたし」

「彩ちゃん落ち着いて…何があるかと思ひかけないよみんな、」

級友の新たな性癖が発覚したところで、彩夏が笑い発作のために

お茶会は解散となつた。

何とも言えない気分で西くんをこれから見るだらうなあと零すと、また彩夏は腹を抱えて笑つて。

そんな彩夏を紗智は支えながら、それでもピクッと口元を動かして。耀子と言えば、西にアキがJK萌えとかキモいって言つてたつて話すわーとけらけら笑いながら階下へ降りていく。

明るいかしまし娘と教授に称された彼女たちのあだ名に虚偽はな  
く。

アキも明るい気分で、入ってきた情報をあれこれ整理しながら彼女たちとともに帰路につくのだった。

？  
【女が四人集まれば何とやらで】（後書き）

## おまけ【後日余談】

「……西つ、西つ……！」

「おい耀子！」の笑い声患者どうにかしなよい……！」

おですれりしを語るか井一

二〇二二年

「貴様ツ！西イ！！！」

「語るに堕ちたね、西くん」

耀子がやんと呟ぐん すこし悲鳴の上にやーし！」

一陣の風が研究室棟を吹き抜けたのは、言わずもがなである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5237w/>

---

彼と私のライフワーク

2011年12月17日20時53分発行